

評論・エッセイ部門 課題作品

「床屋嫌いのパンセ」

堀江敏幸

『おばらばん』より

シヨベルカーが敷地の北西に残っていた最後の壁に長い腕を二度三度ぶつけて石を粉々にすると、もうもうと立ちこめる砂埃すなほこりのなかから、大型電器店の派手な看板が少しずつ姿を現わしてきた。私は通りをはさんだ地所のむかひの建物の玄関口に立って、ずっと以前から待ち受けていたものがついにやってきたとでもいうかのように、おし黙ったままその光景を見つめていた。シヨベルカーとトラックの運転手に、人材派遣会社から送られてきたとおぼしき三人の黒人労働者を加えた即席チームが朝方から開始したらしい取り壊し工事は、私がやってきた昼近くにはもうあらかた終わっていて、頭部を首のなかにたたんだ鳥のようなシヨベルが、ちようど手の甲をぶつける感じで標的をねらっているところだった。石の壁は鈍い音をたて、その音からは想像もできないほどの脆さもろでがらがら崩れ落ちると、無差別に瓦礫がれきの山を築いた。鉄の掌てのひらがそれをぎくしゃくとすくいあげ、トラックの荷台に放り投げてゆく。単調といえば単調なこの作業が繰り返されるうち、私と短いまじわりをむすんだ石造りの家は、あとかたもなく消滅しようとしていた。店内につくりつけてあった椅子や洗面台や大きな鏡のたぐいは業者が引き取ったらしく、黄褐色の床の、艶消つやけしタイルと小さな看板をのぞけば、そこに理髪店があったことを示す痕跡こんせきは、もうなにひとつなかった。

*

私は床屋が嫌いだ。幼い頃から床屋と聞いただけで身体が硬直し、機械仕掛けの椅子に座らされるや大声でわめきたて、押さえつけようとすする理髪師に猛然と立ちむかっていったものである。

同種の闘いは歯医者おくびようの椅子のうえでも再現されていたから、臆病な私が鋭利な刃物を恐れただけの話かもしれないのだが、しまりのない顔を映し出す大きな鏡もいやだったし、椅子に座るまえとあとで顔がすっかり変貌へんぼうするのも好きになれなかった。あまりの狼藉ろうぜきぶりに腹を立てた父親と行きつけの店の主人が結託し、私の頭を丸坊主まるぼうずにしてしまったのはたしか四つの頃で、その日の夕方、土手に座ってしよげ返っている、おそらくは半生でただ一度の坊主頭の写真がいまでもときどき脳裡のうりに蘇よみがえってくる。歴史的なその写真が撮られた日以降、さすがに丸坊主にされるような仕儀にはいたらなかったが、だからといって生来の床屋嫌いが矯正されたわけではなく、病はその後もいくつかの段階を経て育はぐくまれ、生理的である以上に強固な思想として実践されてきたのである。

髪を刈られながら話をするのがまず苦痛なのだ。面白くもないうわさ話を聞かされたり、身上を根ほり葉ほり訊ねたずねられるのが我慢ならなかったから、伸ばせるだけ伸ばした髪を刈るのに、わざわざ遠く離れた町の、一度も入ったことのない店まで出かけて、いかにも通りがかりにその気になったとでもいうそぶりで散髪を申し入れ、異人ゆえに許される黙秘で身を固めて、告解をうながすいかなる誘いにも乗らないようつとめていた。そんな私を、現在に至るまで、さらに頑迷な反床屋主義者として都会に逼塞ひっそくさせる契機となったのは、いつの頃からか洗髪の際にねっとりとした口調で発せられるようになった、「どこかかゆいところはございませんか？」の一語である。両手の自由を奪われ、真っ白に泡立てられた頭髪をもてあましつつ洗面台に身をかがめて、どうか耳の穴にお湯がはいりませんようにと念じるまさにその瞬間発せられるあの台詞せりふには、あ

あなたは絶対に頭のどこかがかゆいはずだという確信がみなぎっており、気の弱い私はなんと反応してよいものやらわからず、それでも勇を鼓して、頭がかゆくてここにやってきたのではなく、髪を切ってもらいたくてこの椅子に座っているのだと返事をするべく口を開くと、唇の両端からシャンプーマじりのお湯が流れ込み、伝えるべき内容が、がらごろとみっともない音にかき消されてしまうのだった。店の隅で順番待ちをしている客が何人もいるというのに、シャワーの音に負けない声でじぶんの頭が不潔であることを誇示する趣味など私にはないし、かりにどこかがむずがゆくとも、背中のかゆい場所ですらきちんと説明できない者に、極端な前傾姿勢をとって上下左右が曖昧あいまいになった頭部に生じているかゆみの震源地を特定できるはずなどないのである。

ほとんど機械的な声で投げつけられるあの文句が、理髪師協会の内示によるものか、業界誌で紹介される新手の客寄せ術に学んだものかはべつとして、洗髪時に担当者の口から漏れ出る台詞と、料金を支払う際に勧められる紙臭いマイルドセブンが、かなりの数の店で共通した現象であることを私は苦々しく確認し、意味のない過剰なサービスへきえきに辟易するばかりだった。カットだけを頼むこともできるのだから、洗髪もなにもいらぬ、ただ髪を刈って欲しいと注文すればそれで済んだのかもしれない。けれども鏡を前にしたあの椅子の囚とらわれ人には、そのひとことがどうしても口にはできないのだ。かくて私は、客の髪を洗うまえに奇妙な台詞を吐いたりしない、無愛想で剛毅ごうぎな幻の理髪師を追い求めるようになり、ようやく理想に近い店を探し当てたのが板橋のとある裏通りに構えていた理髪店で、そこでは洗髪するとき水まわりだけ集めた一角に据えられているマイル張りの洗面台までわざわざ中腰で移動するのだったが、あるうにか通いだして数カ

月後につぶれてしまった。以来、異郷の郊外を歩いてふたたび気持ちのいい店に出会うまで、私は反床屋主義者を標榜ひょうぼうしながらも、意に添わないサービスにひたすら堪えていたというわけなのである。

*

よく晴れて空気の澄みきった冬の日の午後、パリ南郊、ブル・ラ・レーヌのあたりをぶらついているときのことだった。広々とした空き地の片隅に、そこだけ何軒か石造りの一戸建てが肩を寄せあっている区画を発見した私は、なかでもいちばん小ぶりな、灰色がかった白い珪石けいせきの、屋根裏のある平屋に惹ひきつけられた。最初に目にしたのは空き地の側からで、身ぐるみはがされた背中越しの景観は、撮影が中止された映画村のセットに似たわびしさを漂わせていた。表は石でできているのに、裏側の壁面は頼りない板切れが幾枚か重ねてあるだけの、はりぼてのようなたたずまいであることも、そんな印象をつよめる要因だったのだろう。通りにまわると、私が目留めた家の入口には、そこが理髪店であることを示すくすんだ鑄鉄の看板が掲げられ、ドアのうえの門燈の両わきに、向き合って飛んでいる陶製の白い燕つばめがふたつ飾られていた。なかを覗のぞいてみると、主人らしい赤ら顔の老人が、腕を組んだまま私の苦手なああの椅子に身体をあずけて、同年配の男と話をしている。ガラス窓に張られた料金表の数字は、パリ市内の相場の三分の二に満たない額だった。

だが私の足を止めたのは、懐ふところぐあいを気にする必要のない安価な料金でもなければ、始末にお

えなくなっていた髪の毛のせいでもなく、二羽の燕に護まもられたその家のなんともいえぬ愛らしい面構つらえだった。建物のある通りは、すきまだらけの低い板扉で囲まれた空き地の南端に接しており、数軒先には六階建ての古いアパートマンが廃屋になって入口を封鎖されている。地域開発の波に乗れずにいるのがその一面だけだということは、べつだん土地の人間から説明されなくとも容易に看みて取れた。背中を無防備にさらした理髪店も、冷静に判断すればできるだけすみやかに建て替えた方が安全だと思われるほど老朽化していて、たとえばファサード上部の、猫の額ほどの軒下を横に走る雨樋あまどいは左端で朽ちるように折れ曲がり、ちよつとした雨で生じた小規模な鉄砲水がまっすぐに落ちて、壁に染しみをつくるか地面に穴を穿うちかねないようすだったし、雨樋にあわせて屋根までもが左に傾き、瓦かわらの一部は将棋の駒こまを乱雑に積みあげているかに見えた。店内が蛍光灯で均一に照らしだされている街なかの店とちがって、そこにあるのはごくありきたりな両開きの窓から差し込んでいる自然光だけで、客がいないせいか、室内燈はすべて消されている。ともあれドアを手前に引いて薄暗い店内に足を踏み入れ、なにやら真剣に議論しているふたりの老人の目をこちらに引きつけると、服装から明らかに理髪師とわかるほうに、散歩していて偶然ここを通りかかったのだが、予約なしで刈ってもらえないかと控えめに打診してみた。老主人は呆あきれたように、いまやってくれと言うのならそれが予約じゃないかね、さあここに来なさい、千客万来だ、と言う。背もたれの部分に白い布はかけてあったが、案内されるまま腰を下ろしたいかにも時代遅れのその椅子は、床に固定してある基底部の重心がかなり前方に傾いていて、背中を反らさないと鏡のある方へ身体がつんのめってしまう。主人は窓際まどぎわの椅子に腰かけている御

隠居と相変わらず話をつづけながら、湯に浸したあとわざと絞りや甘くしたタオルを用意し、それで髪を包んで湿らせるのかと思つたら、ボール状にグチャグチャまるめて、側頭部から満遍なくビシャツビシャツと打ちつけるのだった。その力が存外つよいので、母国でならどこか離島の理髪店でしかお目にかかれないような、上げ下げも手動のギアで行う椅子に座って神妙にしていくじぶんの顔が、鏡のなかで左右に激しく揺さぶられるさまを追わなければならない。

どんな髪型にするかねと訊ねられて不意に視点の定まった私は、申し訳ないけれど床屋が苦手なので手早くすませてほしい、へんな細工はせずに真ん中で自然に髪が分かれるよう、ぜんたいを短くしてくれば結構だからと説明し、前髪はこのくらい、耳のうへはこのくらいと、じっさいに手を添えてことばの貧しさを補った。なんとね、と老人は声をあげ、話し相手に向き直ると、おい聞いたかね、床屋に入ってきて開口いちばん床屋が嫌いなんてのもうた客ははじめてだ、このムツシューは床屋が嫌いなのにわしの店に入ってきたんだそうだと笑った。

主人は髪を切るのではなくそぎ落とす機能に徹した、剃刀かみそりみたいな道具を軽快にあやつって髪をどんどん短くしていくのだが、両腕の自由を奪うあのビニールのポンチョふう拘束衣などこの世に存在しないとでもいうように、ごわごわした小さなタオルを肩に掛けただけで仕事を進めるものだから、首と言わず肩と言わず、切り落とされた髪が衣服のあいだに滑り落ちてちくちくと肌を刺し、さらには首筋の産毛うぶげを石鹼せっけんもつけずにじよりじよりと剃そるせいで、やがて熱を持ったしつこい痛みまで走り出した。慇懃いんぎんにすぎる東京の床屋の、あの受け身の屈辱がなつかしくなるほどに、それは驚くべき粗暴な歓待であった。

めでたく終了を宣言されてから検査してみると、耳のうへの髪が左右不均衡であることが判明し、私は再度のそぎ落とし作業を堪え忍んだあげく、ようやく放免されたときにはみごとに髪がなくなつて、茹で卵の上部に焼きのりでも貼り付けたような顔になっていた。文句を言う気力すら残っていないだったので、予想していたより短いとだけ伝えたが、老人は動じるふうもなく、そういうこともある、と応えるのだった。そういうこともあるとはなにごとかといきり立つ前に私は笑い出してしまい、床屋嫌いの根拠が、わずか数十分でことごとく覆されてしまったことに、不思議な感動を味わっていた。

むかし近所の知り合いが日本人女性と結婚して、その息子の髪を何年か面倒みたことがあるんだ、あんたの髪はその男の子とよく似た腰のない黒髪だよ。一度だけ中国人の髪を刈ったことがあつたが、あれは一日経ったバゲットみたいに固かつた。顔だけじゃ区別はできんが、髪の毛を触ればあんたが日本人であることくらい、すぐにわかるさ。そうやって主人が胸を張るので、たしかにじぶんは日出る国の人間だが、髪の毛の硬い柔らかいは民族によるものではなく個人差だと思ふと反論したのがきっかけで、これまでついで経験したことのない床屋での会話が成立した。主人は客の国籍を当てたことがよほど嬉しかつたのか、俄然口が滑らかにになり、裏の空き地には大型スーパーができることになっていて、この建物の大家も取り壊しに同意し、つまりはじぶんも立ち退きを示唆されているのだと教えてくれた。そこは老人の持ち家ではなかつたのである。店がなくなつたつて暮らしは成り立つだろうがね、出て行くのを渋つてるのは、いろんな思い出があるからだよ、建物が変われば人も街も変わる。この一帯だけ生きながらえたところで、好き

な街は消えたも同然だ。路頭に迷うって言いまわしがあるだろう？ 人間が道に迷うのは、ビルがひしめく街なかでも、原生林のなかでもなくて、丸裸にされちまった土地でのことだよと、主人はそんなふうにも言うのだった。

三軒隣の家はすでに住人が引き払っていて、いつになるのかは未定だけれども、まちがいなく取り壊される手筈てはずになっていた。入口が封鎖されてからは宿なしの連中が住みつき、ガスも電気も水道もない部屋で生活していると御隠居は解説する。なかには見覚えのある顔もいて、べつに悪さをするわけでも、騒音を立てるわけでもないの、周りも知らぬふりをしているらしい。いまの私なら、多少の危険をも覚悟のうえでその空き家を探索してみるだろう。しかし当時はまだ珪石でできたパリ郊外の一戸建てにさほど執着してはいなかったし、おまけに剃刀負けした首筋に感ずる痛みと、細かい髪の毛がささってむずむずする皮膚のかゆみを必死でこらえていたそのときの状態では、縁もゆかりもない異国の郊外の一軒家がたどりつつある運命を嘆く余裕などなかったのである。

豪放な、ということとはつまり適度以上に乱暴で、失敗をものもしない缺遣はさまづかいと、主人がこちらの反床屋主義を微笑ほほえみながら理解し、ともかく仕事のあいだはよぶんな話をいっさいしないでくれることに救われて、私はそれからこの店で髪を刈ってもらおうようになった。二カ月に一度、どうかすると三カ月ほど間があくこともあったのだが、ふとその気になって出向けば予約なしでいつでも受け入れてもらえたから、休業日に当たらないかぎり散髪の決意を反故ほごにする必要はなかった。

*

白い燕が飾られたその一戸建ての理髪店の周辺が、とつぜん抗しがたい磁力をともなって目の前に立ち現われてきたのは、一年近く経過した秋の夜、ジョルジュ・オリヴィエ・シャトローイノーという、林間の空き地に建てられた館やかたの主を連想させる名前の作家が記したエッセイ集、『ラ・フォルチュヌ』ラ・フォルチュヌに触れたときのことである。一九八七年の刊行だからそれほど古くもないのにゾッキ本扱いされ、ただ同然で放り出してあったその本をヴァングの古物市で拾いあげ、なんの気なしにばらばらめくっていると、なかに「セラミックの燕」と題された章があり、そこには著者の父方の祖父が所有していた石造りの一戸建てに寄せる想おもいが、短いながら暖かい血の通った文章で述べられていたのだった。「馬鹿にしたければしてくださいさっさとけっこう、とにかくわたしにとって、ガレージとあずまやにわきを支えられ、陶製の燕で飾られている郊外の一軒家は、エデンの園の中央に建っていたのである。アダムが追い出されたのはこの隠れ家であり、彼が胸ひき裂かれるような郷愁を抱きつづけていたのもこの家なのだ」。あずまやもガレージもなかったが、老人が護りつづけてきた白い燕のある理髪店は、彼にとってまさしくエデンの園に立つ生の基盤であつただろう。もつともシャトローイノーの記述は、単なる追憶にとどまらない。たった一軒だけ残された家を、個人の思い出につながっているというだけでいたずらに美化することは避け、彼は郊外そのものを一種の聖なる共同体と見なしているのだ。「世界の海緑色の大洋のうえに、永遠に舷舷相接げんげんした不動の小型艦隊たる一戸建ての立ちならぶ郊外には、なにかしら久遠くおんの、神聖な

ものがそなわっている。本物の自然の粗暴さから遠く離れて、都市のみだらな雑踏から遠く離れて、また『悪』から遠く離れて暮らすべき場所は、そこなのである」。

ブル・ラ・レーヌの建設用地の片隅で結束をかためていたあれらの家々は、まさしく「不動の小型艦隊」だった。コンクリート化が進行する周囲の景観のなかでは、書き割りと間違えられないほどに現実味を欠いているものの、それが非現実に近いだけにいっそう神聖さを増していたこともまた事実なのである。シャトーレイノーが幼少時を過ごした祖父の家は、エッソンヌ県のサント・ジュヌヴィエーヴ・デ・ボワにあつて、彼は毎年、療養のためにそこで「ひとつかふたつの季節を過ごしていた」。「セラミックの燕」が収められている『運命』は、大雑把に分けると前半が表題作の「ラ・フォルチュヌ」、後半がアンリ・トマやビオイ・カサーレス、ジョージ・オーウエルの作品評で構成された統一感のない雑文の集成で、問題の一文はやはり前者に属しつつ、長じてのちそうした夢想を糧とする作家たちに親しむことになる少年の、感性の核を保証するものとして読むことができる。

……するとわたしは、いつもの屋根裏部屋や、北米産の松材でできた整理ダンスのうえに置いてある石膏の犬の貯金箱や、こちらは本物の雌犬である「甘ったれのユペット」と再会するのだった。撫でてくれと頻りにおねだりするので、わたしは毎朝、彼女の一日のために、百回ずつ撫でてやった。親しいサクランボの木、スグリの木、ロカイユに井戸、日当たりのいい台所。そんなものとも再会を果たしたのだが、祖父が駅に出かけたあと、台所には焼い

たパンの匂いが漂っていたものだ。おばちゃんは、わたしのパンにバターを塗りながら、若い頃のとんでもないお話を聞かせてくれた。ユーラシア人たる彼女は、アジアを縦横に渡り歩き、その道々、エキゾチックな、数限りない蛮行を目撃したのである。サント・ジュヌヴイエーヴで見出したのは、安定した温良な世界であり、その世界はこうした物語や父の捕虜生活の逸話のおかげで、わたしにとってなお貴重なものとなっていた。

シャトーレイノーの一戸建ては、世の悪意から少年のこころを保護する善意の砦とりでだった。この一節に耳傾けながら私が想い浮かべていたのは、むろん持ち家ではなく借家であったわが理髪店の来し方行く末である。店の来歴についても、また老人の身の上についても私はほとんど訊ねてみなかったし、それどころか、ずっと気にかかっていた門燈の守護神である陶製の燕の由来についても質問したことはなかった。床屋で余計な話はないという誓いは、相変わらず破られていなかったのである。けれどもシャトーレイノーの文章を読んで、はじめてその禁を犯したくなかった。あの石造りの家がいつから建っているのか、老人が入居した当時から燕は飾られていたのか。すぐにも確かめに行きたい気持ちを、しかし私はアイロンのかかったハンカチを丁寧に畳むようにして鎮めた。散髪するにはまだ髪が短かすぎたのだ。あとしばらく我慢して店に出かけたら、そのときさりげなく訊ねてみよう。じつを言えば、シャトーレイノーのエッセイで感心したのはあの章だけで、それほど無邪気にもちあげるべき作家かどうか判断しかねていたという事情もある。せめて裏表紙で宣伝されている、まだ読んだことのない一九八二年のルノードー賞受賞作

《La Faculté des songes》を開いてからでも遅くはないと判断したのだった。

いくつか書店を当たったが見つからず、そこまですることはないと思いつつながら版元まで出かけて入手したその小説をひと息に読んで、私は報われたと思った。物語の主人公は、郊外に移転する大学理学部の建設用地の中央で、将来事務所代わりに使われるべく放置された、石造りの一戸建てだったのである。生活のために仕方なく肉体労働にいそしみ、パリの安ホテルで暮らしているカンタン、動作のろさと、夢見がちな性格のために「重い頭」とあだ名をつけられた、孤児で大蔵省官吏のマノワール、祖父母が残した郊外の家から高速道路建設のために追い出された、図書館司書にして詩人のユゴー。それぞれの不遇と孤独をかちつつ見えぬ糸に導かれるかのように彼らはこの廃屋に惹きつけられ、奇妙な共同生活を開始する。だから本書の《Faculte》は、夢の「能力」ではなく夢の「学部」の謂なのだ。彼らは三者三様の夢を抱えてここに集まってきたのであり、最後に加わった歌手志望のルイーズという若い女性も、夢の学部で学ぶにふさわしい人物だった。じつはルイーズこそ、十年以上前にこの家で幸福な日々を過ごしていた少女の成長した姿で、大人の世界に行きづまった彼女は、幼い頃の思い出に浸された場所へ舞い戻ってきたのである。四人はやがて離散するが、物語の中心をなす家にまわりついた、どこかかりそめの、それでいて落ちつきのある空気は、私を反床屋主義から転向させた老人の店にそっくりだった。

わずらわしい髪とシャトーレイノの本を抱えて再び老人の店に出向いたのは、それから二カ月半ほどしてのことである。だがそこに出現したのは、ゆるやかな時間が流れていたあの石造り

の平屋ではなく、土埃つちぼこりの舞う更地だったのだ。残り少ない建物の骨格を、荒々しい動きで左右からつき崩す機械の腕が、いつのまにか濡ぬれタオルで私の頭部を翻弄ほんろうした老人の手と重なり、シヨベルが揺れるたびごとに、こめかみに陰鬱いんうつな振動が伝わるようだった。

こころひそかに「つばくる館」と呼んでいたあの店が、スーパーマーケットの建設予定地にすっかり吸収されたのを見届けると、私は工事人が引き払うまで近所のカフェで時間をつぶし、夕方こっそり敷地に忍びこんだ。そうしてライターの明かりを頼りに、私を魅了してやまなかった白いセラミックの燕つばめを瓦礫がれきのなかに探ってみたのだが、どこに飛んでいってしまったのか、小さな破片すら見つけることはできなかった。